

温かな夜、
霸王に捧ぐ

北原
亜稀人

N.E.Yers

病院の入院棟には各階に談話室があって、僕はここ二週間、毎日必ず四階の談話室に通っていた。そもそも病院へ通っていたのは父が入院していたからだけれど、そんなものは口実だ。軽い心筋梗塞を起こして入院した父は、今のところ命に別条は無い。退屈しのぎになるような書籍を運んだり、新聞を買いにいったりするための見舞い。母は母で仕事をしているから毎日とは来られなくて、その結果、特に部活もやっていない、彼女がいるわけでもない、暇な高校生でしかない僕が父親の暇つぶし担当になった。

面倒くさいとまでは言わないけれど、病院はあまり好きではなかった。臭いも、漂う空気も、どこかが嫌だ。疲れる。エネルギーを吸い取られる。自分までこの場所の一員になってしまうような、そんな予感を覚える。だから、最初の三回ぐらいは嫌々で通っていた。今は、そうでもない。

割と、運が良かったのだと思う。彼女はその日、たまたま、気分転換で自身が入院しているフロアよりも一つ下の談話室に降りてきていた。何でも、四階の談話室に置いてある本は殆ど読みつくしてしまって、退屈だったらしい。僕も、偶然だった。普段は談話室になんか立ち寄らない。話すべき相手もないし、何よりも苦手な空気の漂う場所だから、そこに立ち寄る理由なんか、何処にも無かった。たまたまだ。いつもは誰かしらいる談話室にその日は誰もいなくて、紙カップに飲み物が注がれるタイプの自動販売機が一台あって、喉が渴いていた。つまり、運が良かったのだ。

談話室は学校の教室の半分ぐらいの大きさと、四人がけのテーブルが二つに、背もたれのないベンチが窓際に二つ。壁には、正しい食生活を進めるポスターや、定期健診の奨めなど、いかにも病院的な掲示物。その中に、入院棟らしく、ドクターの異動やら、新しい検査機器導入の御報告なんかを掲示してある。僕は、窓際のベンチに座って、外を眺めながらコーヒーをすすった。もう、冬だった。窓の向こう、街の景色は寒々しくて、ちょうど目線の高さにある広葉樹は、まもなく冬の姿に変わろうとしていた。あの、最後の一枚の葉が落ちたら？ ザ・ラストリーフ。中学生の頃、授業で読んだ。短くて、読みやすかった。僕が抱いた感想なんかその程度のものであったから、読書感想文でうんざりするほど苦労した覚えがある。風景を眺め、そんな、何の役にも立たないような記憶を辿っていたら、彼女がやってきたのだ。杖をついていて、手には、骨折した人がつけているのをよく見かける三角帯をつけていた。見るからに不自由そうだった。暗い茶色の髪を肩まで伸ばして、白いパジャマ。肌も、作り物のような白さだった。目の前で杖をつき損なって、いきなり転んだ。だから、助けた。それがきっかけだ。彼女にとってはどうだったか分からないけれど、僕にとっては、やはり幸運と呼ぶべきだと思う。彼女のおかげで、病院に来るのが嫌ではなくなった。むしろ、早く来たくてたまらなくなった。

*

あまり、多くを喋らない子だった。年齢は十七歳で、僕よりも一つ下。三ヶ月ぐらい入院して仮の退院、また入院を繰り返しているらしかった。

「何の病気なの？」

彼女は、黙って談話室の外、エレベーター前に設置されているフロア案内のボードを指差した。

「四階」

その言葉に応じて見たそこには「脳神経外科 入院病室」。何を言えば良いのか分からなかった。こういう時、適切な言葉なんてそうは無い。頑張れ、なんて酷く軽はずみで無責任だ。負けるな？ すぐ良くなるよ？ もし僕が言われる側だったら、どれも嫌だ。何の意味もない「ありがとう」が口からこぼれて、終わり。僕の性格が歪んでいるのかもしれないけれど、それでも、嫌。自分が言われたくないことは、人にも言いたくない。そんなことを考えているうちに口から出たのは、「ごめん」の一言だけだった。

「いいの。多分、わたしの前世ってすごく悪人だったのね。何でわたしが、なんて考えても分からないから、わたしはそういうことにしてる」

「そんなこと……」

「きっとね、強盗だったの」

「前世？」

「人を殺して、金を蓄えて、だけど、最後にちょっとだけ改心、みたいな。蓄えたお金を小さな修道院に寄付して、自分はその修道院の近くにある崖から飛び降りて死んだわけ。神様に近い場所で死ねれば、少しは救われるかもしれない、と思って。だけど、あんまり救われなかった。その結果が、わたし。病院と外を行ったりきたりの、不良品」

「そんな言い方やめようよ。不良品なんて……それに、不良品だって、直せばちゃんと……」

「……ごめんなさい、変な話題にしちゃった。強盗あたりから完全に妄想だし」

「病気のこと訊いたのは僕だから……ごめん」

「病院って、そういう場所だから。皆、何処かが悪くている場所。何処かが悪い事とか、治るとか治らない……そういうのを一つずつ気にしていたら、身が持たない。だから、治るためにいる場所、とだけ考えるべきだというのが、最近のわたしの持論かな。結構、真面目でしょ、わたし」

彼女はそう言って、笑った。僕も笑顔をつくった。二人で笑顔でいるうちに、本当に面白くなってきて、ちゃんと本物の笑顔になれた。仲良くなれる気がした。だから、名前を訊いた。返事は一言。「シオン」。シオン？

「本名じゃなくて、暇つぶしの、ネットゲームのキャラクター名ですけどね。ここ、談話室でなら無線でネットにつなげるんです。貴方は？」

「……トシヒコ」

「本名？」

「ネットゲームとか、よく分からないし」

「教えてあげようか。良かったら、だけど。わたしの紹介で初めてもらえるとわたしにも特典があるんで、ぜひ」

「具合悪いのにゲームって、大丈夫なの？」

「これがなかったらわたし、暇死にするし。それに……」

「それに？」

「本当に具合が悪い時なんか、身動きとれないから。動ける時ぐらい好きに遊ばせて」

僕はシオンに家のパソコンのメールアドレスを教えた。帰って確認すると、シオンからちゃんとメールが来ていた。メールアドレスもちゃんと「シオン」だった。ゲームのタイトルと登録方法が書いてあった。登録した。シオン曰く、夕食後、体調の良い日は就寝二十分前まで必ずインしているから、とのことだ。イン、というのはゲームをすることらしい。こうして、僕の生活パターンに、家で毎晩七時半から八時四十分の間ゲームに接続する、が加わった。

*

病院に行くたび、僕とシオンは時間が許す限りゲームの事を話し続けた。要するに、僕がシオンにレベルアップの効率的な方法を教わったり、シオンの武勇伝を拝聴したり。シオンはそのオンラインゲームをプレイする総人口の中で見ても上位二十人に入るような有名プレイヤーだった。

ゲームの話しをしている時、シオンはとても元気で、楽しそうだった。杖や三角帯の痛々しさも感じさせなかった。目を輝かせながら自分の好きなことを精一杯伝えてくれるシオンは、周りにいる他の誰よりも話しやすかった。

夜、ゲームの中のシオンは談話室での様子とは打って変わって、とても静かで、なのに、とても雄弁だ。ゲームの中での会話、入力欄に文字をタイプする`チャット、を彼女は当然ながら殆どしなかった。片腕での操作。無言のキャラクター。けれど、誰にも負けない。敵を無言のまま切り倒して行く。そして、僕の進むための道をつくってくれる。言葉なんか必要なかった。シオンは誰よりも格好良くて、強くて、その姿だけで十分だった。僕は自分でも呆れるぐらいシオンに傾倒し、憧れ、そこいらの漫画の方がよほど手がこんでいるんじゃないかと思えてくるぐらい簡単に、恋に落ちた。恋に落ちたと言いながら、自分で、これが本当に恋と呼べるのかどうかを毎日考え続けた。お昼に学校で、家で夜、寝る前、早くシオンに会いたいと思うから恋。一緒に何処かへ遊びに行きたいと思うから、恋。シオンの抱えている痛みを分かってあげる自信が今一つ持てないから、恋とは呼べない？ 考えて、考え込んで、わけが分からなくなってきた頃にはもう、完全に恋だった。

「トシのキャラクターは弓職なんだから、FA.....ああ、先に一発当てたら、まず距離をおく！ これ鉄則」

「FAって？」

「ファーストアタック.....あのさ、なるべく早く専門用語覚えよう。説明が面倒臭いから」

「pkが何だっけ」

「プレイヤーキラー。通り魔みたいなものよ」

「ksgは？」

「クソが.....何言わせるかなあ。わざとやってるね、さては」

「少しは」

「一時間ぐらいLKするわ、今夜」

僕だって、毎日のように同じゲームをやっているのだから少しは覚える。僕たちがやっているゲーム「ワールドアウェイクII」においてLKは、ローディングキル。つまり、こちら側がインターネット回線を通じてキャラクターのいる位置の情報を読み込んでいる、無抵抗な時間にキャラクターに攻撃を加えて死亡させること。シオンが言うには、ゲームの仕組み上、先にその場所にいるキャラクターには、新しくやってきたキャラクターが読み込み中で硬直しているのが丸見えだから、そこに攻撃を撃ち込んで、相手を死亡させる。ちなみに、キャラクターが死亡すると、それまでのプレイで貯めたお金やポイントが少し減る。一時間から二時間分のプレイがまるっきり無駄になる。僕とシオンと一緒にやっているゲームの基本コンセプトは弱肉強食。データを改竄したりだとか、そういったズルさえしなければ、大体どんな行為も許される。だから、負けないように努力をする。頭を使う。仲間を助け、同時に助けられ少しずつ進めていく。

「まあ、トシの場合はあたしがどうとでも出来るからそんなにしんどい目には遭わせないけどね」

シオンは、ゲーム内で何かしら僕がしくじるたびにこう言い、実際に助けてくれた。お金がなかなか貯まらない時は無担保無期限で莫大な金額を貸してくれたし、なかなかレベルが上がらない時は、とんでもなく強い武器を貸してくれた。代償は、シオンの外出補助。杖をついて出歩くのは危険だから、と主張するシオンのために車椅子を押して、病院の庭に設置されている公園スペースまで。シオンの言い草をそのまま引用するなら、「うちの親、わたしの医療費稼ぐのに大忙しだから」。

彼女の両親は共働きで、忙しくて、病院には休日しか来ないらしい。入院したこともない、実家暮らしの僕には分からない境地だ。週に一回しか会えない両親。もし僕がそうだったら。貧弱な想像力を働かせてみる。カレンダーの日付けが赤い日。両親と会える日。朝からそれを楽しみに待つ僕。病室の扉が開く。両親が入ってくる……この辺りが想像の限界だった。本当にそんな状況だったとしたら、僕は、両親は、その時一体どんな顔をするのやら。

「そなん、すぐ当たり前になるし」

想像の限界を話してみたら、シオンはそう言った。当たり前になったシオンとその両親はどんな顔をしている？ うまく聞けそうもなかったから、何も聞かないでおいた。

学校が終わって病院、父の見舞いを經由して談話室。コーヒーをすすりながら話しをして、夕暮れ時に公園。ブランコの横、或いは、滑り台の脇。車椅子の車輪を固定して、またゲームの話。日が暮れきって、常夜灯がつくころに病院のチャイムが鳴る。まもなく夕食の時間だから病室に戻れ、という意味なのだと言われてくれた。病院エントランスに貸し出しの車椅子を戻して、そこで解散。帰る前に、今日は村で、だとか、どこそこの洞窟で、だとか、ゲーム内での待ち合わせ場所が設定される。僕は家に帰る。時間を待ってゲームに接続する。無言で雄弁なシオンと再会する。

二週間前に突然始まったシオンとの時間。勿論、日によっていろいろなことはあったけれど、大体の物事が予定の範囲内におさまる、概ね順調な日々。半月続いたところで父が退院した。病院に行く目的がシオンだけになった。二ヶ月と一週間目、ゲーム内での待ち合わせの行き違いでケンカになって、一週間、病院にも行かない、ゲームもしない時間を過ごした。我慢しきれなくなった僕が謝って、「許す。猛省せよ」なんてお言葉を頂いた。概ね、順調。

*

その日、金曜日だった。シオンは談話室で会った途端に怒りだすぐらいに機嫌が悪かった。僕の制服のボタンが取れかかっているのが見苦しいだとか何とか。僕がいつものように紙カップのコーヒーを買ってベンチに座ると、それに対しても怒った。

「レディに対して何かたまにはお飲物はいかがですか？ なんていう紳士道は君にはないわけ？」

「いつも、飴玉一個だっていないって断るくせに」

「余はコーヒーを所望する。これへ持て」

「どこの何様だ、お前」

「ユバニエルの霸王、シオン様だ」

ユバニエルというのは僕たちがやっているゲームの、専用サーバーの名称だ。全部で五つのサーバーがあって、それぞれに、ゲームの設定として用意されている神話上の、神様だとか英雄の名称がつけられている。ユバニエルサーバーの中でも指折りの有名人、シオン。霸王は行き過ぎなんじゃないかな、と思うし、それとコーヒーをご馳走することにどう関連があるのかは分からなかったけれど、従わないとゲーム内で泣きたくなるまで殺し続ける、なんて真顔で言われたら、逆らってなんかいられなかった。永久PK対象、とか言うらしい。そんなの冗談じゃない。

コーヒーをもう一杯購入して、シオン様、コーヒーでございます、なんて。渡すと、シオンは少し躊躇うような表情を見せながらひとすすり。薬の副作用で食べたり飲んだりしたくないの、といつも僕がコーヒーを飲み終わるのを待ちながら喋り続けるシオンしか見たことがなかったから、つい、まじまじとその姿を見続けた。また怒られた。どうも今日は、何かしらいつもとは違うらしい。シオンは怒りながら、何処か、泣き出しそうだった。そんな印象的な表情を、差し込んでくる夕暮れ近くの色をした光が照らしていた。目の前の頼りない広葉樹がつくる影によって、一筋、暗がりが生まれていた。見続けていると、何故だか僕まで泣きだしそうになった。

「最初の手術の後にね、殆ど何も食べられなくなったの。先生は、薬のせいだからって言うけど、違う。わたしの中の一部分が、生きることを諦め始めたの。死ぬことを視野に入れ始めたのかもしれ……」

「やめろよ、そんな事」

僕は、シオンの言葉を遮った。別の話題にするつもりだった。もっと、明るくて、楽しい話題。分かっている。こんなの、誤魔化しだ。僕が話を聞きたくなかった。だから耳を塞いだ。逃げようとした。

「聞いて。最後まで。お願いだから」

頷くしか、なかった。

「来週の頭にね、また手術なの。頭蓋骨開いて、おかしくなってるところをもう一回取り除くわけ。グロいでしょ。現実だけど」

「手術すれば……良くなるんでしょ？ 今よりもっと」

「分からない。あたしの生きることを諦め始めている部分がもっと諦めたら、本当に分からない

から……困るよね。いっそ諦めちゃおっかって時々思っちゃうぐらい」

「……………」

「手がさ、痛いんだ。これ、吊ってるじゃない？」

シオンはそう言って、自身の左腕にまかされている三角帯を、空いている右手で指差した。

「折れてたりするわけじゃないんだよ、これ。頭が病気になっちゃった時にね、一緒に動けなくなったの。これ、あたしの中の生きるのを諦めてる部分。だけど身体の他の部分は諦めてないから、痛んで、痛んで、`このままじゃやばいですよ、って教えてくれてるの。だけど、さ……もしもって諦めちゃったらその時どうなるわけ？ 痛くもなくなって、死ぬ？ ちょっとね、時々、それでも良いかって思っちゃってるから……やばいよね、あたし」

「諦めるなって、だから！」

言いたくなかった。こんな台詞。大きな病気なんかしたこともない僕がどれだけ偉そうな事を言ったって、それはただの言葉だ。何の意味も無い。重みもない。言われた側がただしんどくなる、それだけ。分かっているから、言いたくなかった。言いたくなかったけれど、口からこぼれてしまったのだ。もう、全部言うしかなかった。

「ユバニエルの霸王なんだろう？ そんな事言うなよ！ 諦めて、死んじゃってもいいやなんて本気で思ってるわけじゃないんだろう？ だったら、そんな事言うなよ……言うなよ……！」

いつの間にか、僕の目は閉じていた。きっと、目の前に立ちふさがっている現実を見たくなかったから。怖かったから。自分が何も出来ないことが分かり切っていたから。ふと感じたのは、額に触れる冷たい指の感触だった。

「何泣きそうになってんだよ。諦めるわけ無いじゃん、そんなの。と言うか、話を最後まで聞け」

「今夜ね、早く寝なきゃいけないからイン出来ないのね。明日検査だから。で、検査後は毎度ふらっふらだからやっぱり明日もイン出来ません。明後日、いつもの時間にインして、必ず、どんなことがあっても」

「分かった、絶対インする」

「破ったら永久PK対象だかんね」

「破らないって」

「それとさ、手術明けて落ち着くまでは病院来ないでよ？ 麻酔だのなんだのかんだので、前の時は三日間ぐらいかな。ポーっとしっぱなしだったんだから」

「いつまで出入り禁止？」

「追って通達する。よし、本日は下がって良いぞ」

立ち上がり、紙カップをリサイクルボックスに放り込むと、背中に「ありがとう」が飛んできた。気のきいた事なんか言えない。「どういたしまして」とだけ返し、手を振った。シオンも同じように手を振ってくれた。笑っていた。だから、信じることにした。霸王は、最後に必ず勝利する。信じる。

約束の時間、パソコンの電源を入れてゲームのファイルを起動。沢山の構成ファイルが読み込まれていく。ちょうど、ゲームデータが更新される日だったらしく、普段よりも時間がかかった。アカウント名とパスワードを入力。いつものゲーム、いつもの時間。おかしな緊張感があった。胸騒ぎ？ そんな言葉、大嫌いだ。いつも通り。何もかも、いつも通り。自分に言い聞かせていると画面が切り替わり、城下町の隅に、僕の操るキャラクター。シオンからのメッセージがすぐに飛んできた。

「いま あいるのまちにいるから きて すぐに」

片腕で操作するのは、やはり大変らく、シオンからのメッセージには、いつでも変換や句読点がない。文章の区切りはスペースで代用。キーボードをかな入力にして、ボタンを押す回数を極力少なくした結果このスタイルになったようだ。通じるから、何でも良い。

「はやくこい」

十分だ。通じ過ぎるぐらい。シオンがどんな顔をしてキーを入力しているか想像出来る。

「あいるのまちの おしろのまえ」

指定された場所に行くと、シオンはちゃんと居た。普通のプレイヤーでは手にすることなんか永久に出来ないんじゃないかと思えるような豪華絢爛——何十回自慢されたことか——な装備に身を包んだ、霸王。数人の知り合いに既に取り囲まれていた。サーバーでも指折りの有名人。口数の少ない霸王。取り囲む数人がわいのわいの話かけるのに対して、シオンは時折「うん」「うん」「そう」「しらない」と、素っ気ない返事。僕が近寄るとシオンは周囲に向けて「じゃあね」と、とても素っ気ない挨拶をして僕の方に寄ってきた。

「しずかなところいこう ここ ひととおいから らぐい」

らぐい、と言うのはゲームの中で使われる言葉だ。他のプレイヤーが沢山いたり、複雑な背景の描かれている場所だとコンピュータがネット回線を通じてやりとりするデータの量が大きくなって、キャラクターの動きがスロウになったり、カクついたりする。シオンの指定した場所——アイルの街、城前——は、このゲームでも一番にぎわう、皆の待ち合わせスポットだった。ゲーム内の店やサービス施設もこの街に集まっているし、プレイヤー自身が不要なアイテムを自由に販売するバザー会場も、この街が一番の規模だ。

「なんでアイルだったの？ 珍しい」

シオンは、使用しているコンピューターが古いこともあって、この街が好きではなかった。買いたいものがあったら僕に買いに行かせたし、二人で遊んでいる時に、僕が用事があったアイルに行くことになると「あとでごうりゅうよろしく」なんてメッセージがしばしば流れた。シオンが自分からアイルの街を指定するなんて、これまでには一度も無いことだった。だから、気になったのだ。いつも通りなのかどうかの確認。

僕がメッセージを流すと、シオンがその場で立ち止まる。彼女がメッセージを入力するのを待つ。機嫌が悪い時は「めんどくさいからはなしかけるな」なんて返ってくる。移動にはマウスを使うから、シオンの場合同時には出来ない。だから僕も立ち止まる。待つ。大体三十秒ぐらい。シオンはこの三十秒を無駄だ、勿体ない、といつも怒っていた。

「たまには にぎやかなところもいいでしょ きょう あんまり ぱわーないし」

「そうなの？」

「けんさ つかれた だから でーとごっこ」

「ごっこじゃなくて、デートでいいじゃん」

面と向かってだったら絶対に言えないような台詞でも、ゲーム画面越しだとそんなに苦労せずに言える。全部が冗談になるような、そんな気がする。だから僕はしょっちゅうこの手の台詞をキャラクターごし、シオンに届ける。そうするとシオンはきちんと「なにそのはずかしいせりふ」だとか「わらわせんな」。ちゃんと、冗談にしてくれる。それが、僕達のいつも通り。だから、困るのだ。「そうだね」なんて返事が戻ってきたら、その途端、画面に映り込む自分の顔が二目と見られないようなみっともないものになる。自分が次にどんな事を言えばいいのか、まるで分からなくなる。いつも通り？ 一つも、いつも通りじゃない。少なくともシオンはいつもとは違う何かを思って、いつもとは違う何かを感じながらキャラクターを動かしている。それは多分、いつもとは違う何かをこれからやろうとしているから。それが何だか分からないままにそう思った。だから僕も、ゲームに接続して十五分で諦めた。今日は少しもいつも通りじゃない。胸騒ぎがしたって少しも不思議じゃない。胸騒ぎ、不安、焦燥。ゲーム越しじゃない、シオンにちゃんと会いたくてたまらなかった。

*

「あした あたまがひらかれます」

シオンがそんなメッセージを送ってきたのは、アイルの街をぐるりと一周して、すぐの事だった。アイルの街は、市街地だの商業地だの、旧市街だのが入り組んでいて、一回りすると十五分ぐらいかかる。その間、僕達はずっと無言のまま。バザーを冷やかして、無意味にノンプレイヤーのキャラクターに斬りついたりしながら、一周。僕達がやって来たのは、街の一番外れ、市街地、として作られているエリアの奥。小さな神殿だった。多分、アイルの街で一番静かな場所。用事のある人しか来ないし、そもそも用事のある人があまりいない。ゲームを設計した人が忘れてしまったかのように、このゲームにおける神殿は、ただの雰囲気だ。

壁にたいまつ。全部で六個。細かな設計をきちんとしているゲームで、かすかに揺らめく炎や、それによって形を複雑に変化させる影まできちんと表現されている。神殿の中は、僕達と、石像だけ。あたまがひらかれます？ 僕が嫌がることじゃない。応援して、励まさないといけない。きっとシオンも、そうして欲しいはず。なのに、言葉が出てこなかった。炎が揺れて、影がうごめいて、僕は画面のこちら側で固まる。シオンは今、どんな顔をしている？ 考えたら、胸が苦しくなった。

「すこしずつ ゆっくりこわれていくほうが いいのにね」

「どういう事？」

「だって しゅじゅつ したらいきなり こわれちゃうかもしれないんだよ せんせいも そのかのうせいもあります だって」

「治るよ、絶対治る」

「そういつてくれるとうれしいけど ほんとにわからないんだよ こわい にげたい」

霸王の弱音は、とても、とても心に刺さった。考えるよりも先に、僕の手はメッセージを打ち出していた。とても衝動的で、乱暴で、向こう見ずな言葉。出来ない事なんて分かり切っているのに。

「逃げようか、一緒に。僕が車椅子押すから。邪魔する奴とか撥ねとばしてやる」

返信は、しばらく戻ってこなかった。ぼくとシオンのキャラクターそれぞれが、退屈そうな姿をたいまつに照らされていた。影が揺れていた。単調な、ループさせることを前提に作られたBGMが一周。どいつもこいつも、人の気も知らないで。

「こまらせてごめん それより もっとたのしいはなししよう」

それからは、沢山の雑談。談話室や公園で交わすのとはまた違う、ふざけあった言葉達が、チャットの表示される小窓にずらりと並んだ。僕が「君を守るためなら死ぬる」なんて言えば、シオンは「わたしのいのち けいけんち4ぱーせんと か」なんて戻ってくる。「わたしのおはかのまえでなかないでください（わらい）」とシオンが送ってきた時は少し対応に困った。結局、「シオンならまず間違いなく化けて出ると思う」なんて、自分でもよく分からない返答をした。ふざけあい。温かな夜。不安から目を背けて、目の前にあるものだけを切り取って、少しでも笑えたら、きっと大丈夫。

ひとしきり話して、少しの沈黙。特に前フリなく届いた「おちます またね」。時間は八時半過ぎ。いつも通りのゲーム終了時間まではまだ少しある。いつも通りなんかじゃないのだ、今日は。それでも、嫌だった。あと十分あるじゃないか。そう思った。画面の中、シオンのキャラクターが消えていった。ログ・アウト。待て、と慌ててメッセージ。届かなかった。そのかわり、ゲームシステムから、`あなたに貨物が届いています、。送り主、シオン。無言の間に操作していたらしい。届いたものは、シオンが自慢の種としてずっと愛用していた豪華装備一式だった。

。

*

電車もまだある時間で、気持ちは高ぶっていて、たまらなくて、病院の就寝時間なんか知ったことじゃなかった。お守り、或いはそれに類するもの。部屋中見回して、破魔矢しかなかった。何だか違う気がしたけれど、そのまま紙袋に突っ込んだ。家を飛び出した。駅まで全力で走った。夜が、街を歩く人が、月が、外灯が、皆して僕の事を馬鹿にしているような、そんな気がした。

。

電車に乗って、病院の最寄り駅。殆どの明かりが落とされた、鎮まり返った敷地内。当たり前だけれど、公園にも誰もいなかった。夜間通用口から入って受付直行。伝えるべき用件、それを音にするための言葉。電車の中で何度も、何度も繰り返してきた。それでも言い淀んだ。シオンの本名を知らないのだから、仕方ないじゃないか。明日手術をする脳神経外科に入院中の、談話室でいつもゲームをしている女の子。他に、伝えようが無かった。受付にいた守衛のおじさんは苦笑しながら、紙袋を受け取ってくれた。やるべき事、終わり。棄てられずに、ちゃんとシオン

に届くことをただ祈るだけだ。

*

家に戻っても寝つけるわけがなくて、ずっとゲーム。不安な、鬱陶しい夜を少しでもやり過ごそうと僕なりに考えた結果だ。シオンと一緒に歩いたフィールド。シオンに教えてもらった戦い方。FAを入れて、一度距離を取る。僕の動かすキャラクターは、平坦な表情を崩さない。あくまでも「いつも通り」を装っていた。

寝静まった家のキッチンで、自分でコーヒーを入れた。普段殆どやらない事だから手間取った上に失敗した。談話室のコーヒーの方が百倍マシだ。地獄を味で表現しなさい、なんて課題があったら良い線いきそうな、そんな、残念な味だった。

一人で、シオンと別れた神殿に行った。出来ることは全部やっておきたかったのだ。石像の前に、シオンから送りつけられた装備品一式を並べて、その前にキャラクターを座らせた。お祈りのつもり。霸王復活のための儀式とでも名付けておく。僕も画面の前で目を閉じて、繰り返し、お祈り。霸王復活。霸王は負けない。祈って、祈って、祈った。じき、朝になった。シオンからメールが届いた。

「や がとどくとはおもわなかった さすがゆみしょく がんばる ありがとう」

頑張れ、とはやっぱり言いたくなかった。それはとても無責任な言葉だ。だから、その単語を外して、返信。

「終わったら、賑やかなところ行こう。今度は画面越しじゃなくて」

霸王を信じて、待つだけだ。